財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団広報誌

南ぬ風

Vol.10
2009.1～3
冬号

［南ぬ風インタビュー］造園家・桐蔭横浜大学特任教授/涌井 史郎

《沖縄の色・形》壺屋の歴史が伝わる赤絵の器/壺屋焼

ふしぎがいっぱい 公園点描

首里城公園

万国津梁の鐘（ばんこくしんりょう）

この鐘は、歴史資料では1458年に首里城正殿に掛けられていたと記録されているが、具体的な設置場所が不明であるため、広福門正面の供屋に設置された。沖縄県立博物館に収蔵されている「万国津梁の鐘」のレプリカである。鐘には「琉球国は南海の美しい国であり、朝鮮、中国、日本との間にあって、船を万国の架け橋とし、貿易によって栄える国である」という主旨の銘文が刻まれており、往時の海洋王国としての誇らしい心意気が示されている。

〈高さ154.9㎝、口径93.1㎝、重さ721kg〉

財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団広報誌

季刊誌 南ぬ風 冬号 Vol.10 2009.1~3

編集・発行/財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団

2009年1月発行

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888番地 TEL.0980-48-3645(代) FAX.0980-48-3900

(財)海洋博覧会記念公園管理財団公式サイト kaiyouhaku.jp

国営沖縄記念公園公式サイト oki-park.jp

ふぇー 南ぬ風 かじ

誌名『南ぬ風(ふぇーぬかじ)』について

「南ぬ風」は梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信することを意味しています。

C O N T E N T S

03 南ぬ風インタビュー　Vol.3
南に開かれた環境教育の場として花開いて欲しい。
造園家　桐蔭横浜大学特任教授／涌井史郎

06 沖縄の色・形
壺屋の歴史が伝わる赤絵の器　壺屋焼
取材協力／新垣製陶所

08 沖縄の自然　南の島の植物と動物たち
シリーズ沖縄の大木③　アコウ
シリーズ沖縄の希少動植物③　オナガサイシン／ヤシガニ

10 沖縄の民話
黄金の瓜種（こがねのうりざね）
資料提供／NPO法人沖縄伝承話資料センター

12 海洋博公園の管理運営
おきなわ郷土村
沖縄の歴史と文化を伝える

14 財団の事業紹介
亜熱帯性動植物に関する調査研究・普及啓発事業
絶滅危惧種タナゴモドキ繁殖への取り組み／海洋博公園での学芸員実習／マナティーしいく体験／イルカの長期飼育への取り組み／オキナワセッコクの着生試験／ハイビスカスの収集
首里城に関する調査研究・普及啓発事業
皇帝御書扁額『中山世土』の製作

18 公園ニュース＆イベント情報
海洋博公園
新春果報でーびる／第30回海洋博公園全国トリムマラソン／第4回美ら海花まつり／沖縄国際洋蘭博覧会／黒糖作り体験／三線演奏体験／冬休みイルカ学習会／植物のクラフト作り／植物園ガイド／グラウンド・ゴルフ
首里城公園
第17回首里城公園「新春の宴」／首里城花まつり
財団からのお知らせ

20 ふしぎがいっぱい公園点描
万国津梁の鐘　首里城公園

表紙について

浜の花㊀花藪

名嘉睦稔（なかぼくねん）
一九五三年伊是名島生まれ。版画家。造形作家。月桃紙に裏手彩色と呼ばれる技法で制作される作品群は、われわれ現代人が見過ごしてしまいがちな大自然の機微、生きとし生けるものの魂の声を、時に優しく、時に力強く、私達に伝えてくれる。

Fe-nu-kaji Interview
南ぬ風インタビュー vol 3

造園家
桐蔭横浜大学特任教授
涌井 史郎
Shirou Wakui

南に開かれた環境教育の場として花開いて欲しい。

造園家の仕事は「囲われた楽園」をつくること。沖縄との関わりも深い涌井史郎氏に、造園の目的や役割、海洋博公園について語っていただきました。

「地球は囲われた楽園」

――まずは造園について、その目的や役割についてお聞かせください。

涌井　基本的には“ガーデン”という言葉に着目すべきだと思っています。ガーデンというのは古代ヘブライ語に語源があって「囲われた楽園（エデン）」という意味なんです。造園家の仕事というのはこのガーデン、「囲われた楽園」をつくることです。従って庭園の仕事はもちろん、一つの地域であっても、ある一定の生態系のユニットといいますか、それによって「囲われた楽園」にしないといけないと考えています。

もっと大きなスケールで言えば地球も囲われた楽園です。地球を直径一メートルの大きさにすると、その上にはわずか一ミリの膜があるんです。それが生命圏です。地球という惑星の上のたった一ミリの薄い膜、これが我々の財産なんです。これこそまさに「囲われた楽園」だと思っています。従って造園家の仕事というのは、大きく言えば地球全体の環境をどういうふうに考えていくかということでもあるわけです。

我々の生活は全て生物の生態系サービスの上に成り立っています。生態系サービスというのは、四十六億年間の地球の歴史の中で、三十八億年かけて地球が作り出した生命の薄い膜、「囲われた楽園」なんです。それを真剣に考えなければなりませんが、人類が登場したのはわずか五百万年前なんです。四十六億年を一年に置き換えてみると、人類は十二月のクリスマス過ぎに誕生したに過ぎません。登場したと言うよりも、登場できる条件が整ったと言った方が正確かもしれません。この三十八億年を一年に置き換えると、たった一秒で、産業革命の一秒で壊してしまったんです。最初の問いに答えるならば、地球がもっている命の仕組み、命の素晴らしさを庭師として再構築すること、これが造園家の目的であり役割だと思っています。

「突き抜ける科学ではなく繋がり広がる科学」

――涌井先生のこれまでのご経験から感じておられることにはどんなことがありますか。

涌井　いろいろありますが、形になるものと形にならないものがあるということですね。形ということで言えば、沖縄では「万座ビーチ」や「海洋博公園」、「宮古島リゾート」、本

[わくい　しろう] 1945年神奈川県生まれ。東京農業大学農学部造園学科中退。東急グループ傘下の造園会社「石勝エクステリア」を設立。造園家として多摩田園都市、全日空万座ビーチホテル、ハウステンボス、東急宮古島リゾート等のランドスケープ・デザインを手掛ける。2002年には愛・地球博会場の演出総合プロデューサーを務める。現在、（社）国際観光施設協会副会長、（社）日本造園学会副会長、桐蔭横浜大学特任教授、中部大学教授、東京農業大学客員教授。TBSテレビ「サンデーモーニング」にコメンテーターとしても出演。著書に『景観から見た日本の心』（日本放送出版協会）などがある。

土で言えば「ハウステンボス」や、ここ多摩田園都市もそうです。「愛・地球博」の会場もそうです。しかし、形も重要ですが、我々造園家は建築家と違って仕組みなんです。

二十一世紀において何が重要かと言えば、〝突き抜ける科学〟だと思っています。突き抜ける科学というのは単体の要素、建物をつくるとかそういうことになりますが、繋がりを広げる科学、生態系というのはエネルギーと物質の代謝の仕組みなんです。命が担い合う仕組みです。だから〝形ありき〟じゃダメなんです。そういう仕組みを自然に倣ってどのように作るか、再構築するかというのが非常に大切になります。自然という字は「自ずから然り」なんです。自然が持っている仕組みに寄り添うこと、これが建築領域と造園領域の違いですね。

私が沖縄を好きなのは、沖縄は自然に対して敬意を払うところから始まることです。例えば何かを始めようとすると、良い悪いは別としてユタ※1の人たちが来て神様に拝むところから始まる。つまり、ありとあらゆるところに神という存在、人間を超越した存在があって、全て神に対する敬意から始まるわけです。本当はこれが日本人の原点なんです。自然というのは我々の下にあるものではなくて、あくまでも敬うもの、そこからスタートするんです。

ところが一万年前に起きた農業革命によって、自然というものが敬うべき存在から一歩進んで経済という、生存環境機能から経済機能へとシフトしたわけです。それでもまだ自然への畏敬は残っていましたが、第二の革命、産業革命が起き、その後に動力革命、エネルギー革命、情報革命の三つの小革命が起こります。

産業革命が起きたときに、そこに寄り添う近代科学というのは自然を資源として捉え、資源をいかに活用するか、いかに利用するか、自然は経済の対象であると割り切っちゃったわけです。その背景にはニュートンとか様々な人たちの影響があります。例えばデカルトは、自然と人間の関係を捨てて自然か人間かを選択すべきだと説いた。ここで近代科学は分析の方向へ進むんです。一つひとつの細かな事象を明らかにしていくことが重要とされ、〝突き抜ける科学〟にいくわけです。それで自然は無限であると信じて突き進んで、結局、今、我々が自然のしっぺ返しを受けているわけです。我々がどこに立ち返らないといけないかというと、自然こそ人間を支える存在なんだという生存環境機能で、今、実は第三の革命・環境革命が起きようとしています。

今、サブプライムローンや株の問題がありますが、私は経済現象とは見ていません。少品種大量生産、自然資源収奪型、要するに三百年続いた社会構造が見事に崩れ始めているんです。環境と共生する人間本来の在り方を忘れて、文明的存在だと考えてきたわけです。ここで改めて人間は生物的存在なんだという、つまり広がりと繋がりをどうやって確保していくかということが問われ始めています。それがサステナビリティ、持続的な未来をつくる上で一番重要だと気づいたんですよ。

そこで、〝庭園の管理人〟として大事なことは、こういう時にこそ仕組みやシステムを前提にしたものを提案したり、そういう仕掛けやシステムをリードしていかないといけないということです。しかし、実はこういうことを担う人たちは造園家ではなく一般の人たちなんです。従って、そういう人たちのためのステージをどうやって演出していくかがすごく大事になります。『沖縄美ら海水族館』に来る人は『海ってすごい』と感じて海を眺め、『海の中はこうなっているんだ、大事にしなきゃ』と思うわけでしょう。それが仕掛けなんです。無形の仕掛けをどうやって作っていくかが非常に大事だと思うわけです。

人間の幸せを考えたときに、工業化社会における幸せの定義というのは、「幸福＝物的充足度／物的欲求」なんです。つまり、幸せというのは自分の欲しいものがどれくらい手に入るかです。しかし、環境革命以降は違う。「幸福＝時間充足度／自己実現欲求」です。自分らしく生きていくということに、どのくらいの時間を割けるか、これは沖縄の魅力のポイントでもありますね。人生という限られた時間の中で、沖縄にいれば自分らしくいられる時間が長く感じられるという、沖縄は広がりと繋がりの社会ですからね。

「重要なことは そこにある地域遺伝子」

――〝繋がり〟ということで、涌井先生と海洋博公園との繋がり、関わりについてお聞かせください。

涌井　沖縄国際海洋博覧会当時、私は宮古島で仕事をしていました。それ以前にも南方同胞援護会という、今の沖縄協会ですが、そこで硫黄島返還にまつわる仕事の手伝いをしたりと、そういう意味では沖縄と元々繋がりがありました。沖縄国際海洋博覧会は沖縄の北部地域の活性化、沖縄本島を平均的に底上げしようというのが目的でいろんな人が関わっていますが、その下敷きというのが北部地域レクリエーション、通称「北レク」といわれていましたが、私はそのレポートを作るときに参加したんです。

そこで、私が主張したのは「沖縄の人たちの芸術性とか創造性に委ねるべきだ」ということで、当時、沖縄の文化人の束ね役だった徳永盛保さんに「沖縄の人たちは謙虚だからあまり前に出ようとしない。沖縄の博覧会なんだから、沖縄の人たちを束ねないとダメですよ」と言ったことがあります。当時は私も若かったですから、先輩たちに任せた方がいいということで、外側から応援していたんですが、気持ちの中では、ここで何をすべきかをずっと考えていました。

それで沖縄国際海洋博覧会以降、私が常に声を大にして反対したのは、沖縄の人たちがすぐに「ハワイ」を引き合いに出すことでした。私は「ハワイじゃない、沖縄はパリを目指すべきだ」と。沖縄は有形のものは少ないけれど、無形のものがたくさんあります。無形のものが押入れの後ろにしまわれているんです。

涌井先生の企画・設計による「メモリアルアカデミウム」（横浜地方裁判所の陪審法廷が移築復元されている）の2Fにて。

宮古島でトライアスロン大会が始まったとき、それぞれの集落にあんなに祭りがあったなんて驚きました。突然、応援のために押入れの後ろからいろんなものが出てきて、昔の祭りが復活したわけです。地域の中だけで行っていたような祭りで、隣りの集落の人もあまり知らないような祭りです。それと同じ構図があるべきで、そこを極めていくと沖縄は非常に魅力的なところになるんですけどね。

景観の景という字は、「京」の上に「日」がのっていて地域が光るということ。「観」は目で見るのでなく心で見る。その地域が光輝いている有様を心で見るということです。一番重要なことは、そこにある地域遺伝子、文化性なんですよ。地域遺伝子というものをきちっとしておかないと、あいうものは出てきません。

海洋博公園では『沖縄美ら海水族館』も重要ですが、『海洋文化館』は日本の宝だと思っています。整備さえすれば大阪の民博（国立民族博物館）をしのぐくらいです。『海洋文化館』には海洋民族としての日本人のルーツのすべてがある。そこに住んでいる人たちの血の中に流れているもの、自然と向き合う中で生まれてくる知恵が形になったもの、これが景観です。「景観十年、風景百年、風土千年」というのがありますが、風土というじいさんばあさんの下に、風景というお父さんお母さんがあって、景観という子どもがあるということです。景観について議論するときは地域遺伝子がきちっと投影されているかどうかです。

「南に開かれた環境教育の場」

――最後に、今後の海洋博公園に期待することなどについてお聞かせ下さい。

涌井　海洋博公園は他の国営公園とは全く事情が違っていまして、『沖縄美ら海水族館』は復帰当時の北部振興策を見事に開花させた企画ではないかと思っています。昔は三百万人といわれていた観光客も、今や一千万人が目標とされています。これには議論がありますが、いずれにしても沖縄の発展に海洋博公園が大きく寄与してきたことは間違いありません。しかし、これはレアなケースだと思います。

海洋博公園に今後考えてもらいたいことは、一つは沖縄が太平洋島嶼諸国のゲートウェイ、入口であるということです。これについては、いつも「万国津梁の鐘」※2を引き合いに出すんですが、あの鐘に銘記されている詩文にもう一度立ち返って欲しいということです。――琉球という小さな島で、朝鮮半島を自分の唇や歯のようにして、明国を自分の頭のようにして、大和を自分の体のようにして、三つの特色を活かしながらその架け橋になって――実に壮大ですね。でも事実だと思うんですよ。日本人のルーツというのは、一つは朝鮮半島から、もう一つはメコン河を下って北上して台湾、沖縄、日本に入ってくる。こういう道筋があるわけです。そういう道筋を意識した南に開かれた国営公園であってほしいと思います。

二つ目は、海にもっと拘って欲しいということがありますが、とにかく沖縄県民が誇るべき自然と共生するための知恵、これを海洋博公園でトレーニングして欲しいと思います。たくさんのボランティアを受け入れて、南に向けた環境教育の場ということで、東南アジアの留学生を受け入れてもいい。そこで環境教育を受けた人間がどんどん世界に広がっていく。そういう拠点になって欲しいと思います。

沖縄は今、芸能の世界では地域遺伝子が見事に花開いている。次に環境教育の世界で花開いて欲しい。その拠点、センターが海洋博公園にあるべきだと思います。具体的なことを言えば、「熱帯・亜熱帯都市緑化植物園」をもっと立派にして欲しいと思っています。あそこを交流センターにして、インドネシアやフィリピン、ラオス、カンボジアの人々がいて、「熱帯雨林について考えよう」とか、そんな議論ができる場になれば最高ですね。大学院大学もできるわけですから、そういう所とも組んで、ぜひ、実現してもらいたいと期待しています。

（平成二十年十月三十一日、桐蔭横浜大学にて）

涌井研究室のある先端医用工学センターの入り口で。

※1.ユタ
神霊や死霊など超自然的存在と交流し、宣託、卜占（ぼくせん）、病気治療などをおこなう呪術・宗教的職能者。

※2.万国津梁の鐘（ばんこくしんりょうのかね）
1458年、時の琉球国王・尚泰久（しょう たいきゅう）の命により鋳造され首里城正殿に掛けられた鐘。鐘に刻まれた銘文の一部をとって「万国津梁の鐘」といわれる。本誌裏表紙の「公園点描」でも紹介。

壺屋焼

壺屋の歴史が伝わる赤絵の器

沖縄の焼物と言えば「壺屋焼」である。今から三百三十年ほど前、琉球王府が各地にあった窯元を一ヶ所に集めたところが壺屋で、その伝統は今もしっかりと受け継がれている。その壺屋で七代も続く窯元・新垣製陶所を訪ね、壺屋焼の現場を見せてもらった。

取材協力：新垣製陶所

「荒焼き（あらやち）」と「上焼き（じょーやち）」

那覇市の公設市場を東側に抜けると整備された石畳の道が始まる。石畳道の両脇には陶器店が並び焼物の町・壺屋を実感させてくれる。その石畳道を少し脇に入ると、それぞれの窯を持つ陶工たちの工房がある。新垣製陶所は、この石畳道が国道330号に突き当たる少し手前を右に入った所にある。

新垣製陶所の工房主・新垣勲さんは、民芸の柳宗悦氏や浜田庄司氏らと交友のあった祖父・栄徳さん、名陶工と呼ばれた栄三郎さんを父にもつ七代目であり、新垣さんも現代の名工・日本伝統工芸士の一人である。

琉球の歴史をまとめた『球陽』によると、琉球王国時代の一六八二年頃に美里の知花窯、首里の宝口窯、那覇の湧田窯を牧志村の南に移したとある。そこが現在の壺屋である。その昔、琉球国には中国・朝鮮・薩摩・南方系のいろいろな焼き物が伝来し、それらが融合されて壺屋独自の焼き物が誕生したといわれている。

壺屋焼は大きく分けると「荒焼き」と「上焼き」の二つがある。荒焼きは釉薬を使わない素朴な焼物で、水や酒、味噌など貯蔵用の甕類など形の大きなものが主流である。上焼きは釉薬を使った焼物で花器、食器、酒器など小さなものが主流だが、壺屋焼は日用雑器として使われてきたため装飾や小細工が少なく、どっしりとした風合いとおおらかな作風に特徴がある。

独特の風合いを持つ赤絵

新垣製陶所の工房隣にある展示室を覗くと、「上焼き」の壺、皿、花瓶、湯飲みなどが並べられている。しかも、そのほとんどが赤絵の器である。線彫りの紋様に浮かぶ躍動感あふれる花や魚の絵と深みのある赤色に目を奪われる。赤絵は釉薬をかけて一度焼いた陶磁器に赤や緑の絵付けをし、再び窯に入れて焼いたもので、赤色の絵や文様が主調になることから赤絵、色絵と呼ばれている。

沖縄の赤絵は、平田典通という人が中国から持ち帰った技法といわれているが、白化粧土と釉薬の材料に特徴があり、おおらかな絵柄とあいまって独特な風合いをもっている。白化粧は"化粧がけ"といわれるもので、陶土の素地を隠すためのものだが、この白色は壺屋焼独特のものといわれる。

新垣さんに、線彫り用の彫刻刀を見せてもらったが、箸の太さぐらいのもので片方の刃はV字形、もう一方の先は針のように尖らせてあった。新垣さん自らが作ったもので細かい線を描くときに使うのだという。顔料には、赤は酸化鉄を精製したベンガラ、緑は酸化銅を精製したもの、青にはコバルトを使うが、色の濃淡にも新垣さん独自の工夫が凝らされている。

鮮やかな手捌きでロクロをまわす新垣勲さん

南国の風景に映える赤絵の器

見て学べ

壺屋には「見て学べ」という言葉がある。新垣さんも父・栄三郎さんから幼少の頃から何度となく聞かされた言葉でもある。新垣さんは大阪で工芸デザインを学んだあと、家業の陶芸の道を歩み始めるが、「見て学べ」の世界だけに何も教えてもらえなかった。薪を運搬したり、土を運んだりの雑用をこなしながら、陶工たちの手先を見て、その技法を学び取っていった。ロクロは職人の数だけしかなかったので、職人が帰ったあとに自分で練習するしかなかったという。「先輩たちの手の動きを見なさい。形をつくるときにどう手が動いているのか。自分で考えながら見ることが大事だ」と、それが父親の口ぐせだったという。そんな中で、新垣さんは何人もの職人の技を見て、何度も失敗を繰り返しながら自分なりの形を作り上げていった。

壺屋では、日常生活で使う食器、酒器、壺などの入れ物を数多く作ってきた。先の大戦では、焼失した生活用品を供給するため、壺屋の職人たちは収容所から早めに帰されたという。壺屋にはロクロ成形のほかに、同じ形のものを生産するために「タタラ成形」「型押し成形」などの技法がある。新垣さんも抱瓶づくりに「型押し成形」を活用している。自分で作った二つの石膏の型に粘土を押し込んでいき、二つの型を合わせて一つの抱瓶に仕上げていくものである。

右）息子さんの新垣貴司さん（向かって右）と新垣文啓さん（向かって左）
下）壺屋の伝統と焼き物の魅力を語る新垣勲さん。新垣さんは1944年生まれ。沖縄総合事務局長賞はじめ日本伝統工芸士会組合役員功労賞、経済産業大臣功労賞、経済産業大臣賞など数々の賞を受賞している。

伸びやかな魚の絵が特徴的な新垣さんの赤絵皿

「型押し成形」で重要なことは土の粘り気である。粘りのない土を使うと、焼いたときにひびが入ったり割れたりする。陶土については、壺屋陶器事業協同組合に陶土製造工場があるが、新垣さんは、その陶土に独自の工夫をして粘り気を出している。「焼物は何と言っても土が第一、ふつうは一カ所の土だけでなく三、四種類の土を混ぜますが、その時に粘り気のある土を混ぜるのが大事、そして実際に焼いてみて、焼物に適した土かどうかをみないとだめですね」と語る。もちろん焼物は土づくりだけではない。成形、乾燥、加飾、釉薬、焼きなど多くの工程があり、どれ一つ取っても手抜きできるものはない。

新垣製陶所には今、陶器作りに励む二人の若者がいる。新垣さんの息子さんである。後継者不足が叫ばれる中、心強い限りである。父親の手を見つめて、壺屋焼の伝統をしっかりと受け継いでもらいたいものである。

沖縄の自然
Nature of Okinawa

南の島の植物と動物たち

和名：アコウ
科名：クワ科
学名：*Ficus superba Miq.var.japonica Miq.*

シリーズ 沖縄の大木③

アコウ

アコウは、沖縄では「アコー」や「アコーギ」、「ウスクガズマル」と呼ばれ比較的身近に存在する樹木である。クワ科に属し、ガジュマルと同じように気根を出して、他の樹木に着生し相手を気根で被い枯死させることもある。また、不定期に短期間落葉することが知られている。

沖縄県名護市字済井出（スムイデ）にあるアコウは「済井出のアコウ」と呼ばれ、古くから地域住民に親しまれている。本島内のアコウの中では最大級の幹周りをもち、済井出区長や字誌編纂委員等によると樹齢はおよそ１７０～１８０年とか。幹は地上からおよそ50㎝の部分で３本に分岐しているが、その上部の幹周は10ｍ以上、分岐した主幹の部分でさえ幹周３ｍ以上の大木である。

この木は、当時、この場所の近くに住んでいた方が家の茅葺き屋根に生えてきたアコウの幼木を取って植え付けたものと伝えられている。広い緑陰は昔から人々の集まる場所や子供たちの遊び場として使われてきた。戦前は幹に穴をあけ、鉄で作ったポストも設置していたそうで、区民の生活の場としてアコウの木が位置づけられていたことがわかる。また、旧4月のアブシバレー（畦払い）と呼ばれる年中行事では、この木の下で相撲をとることとなっていた（現在は、枝が下に垂れ下がってきている為、場所を公民館側に変更している）。

現在でも、アコウの緑陰は近くの保育園の子供たちの格好の遊び場となっている。すぐそばにある公民館の区長を中心に、その生育をきちんと観察して施肥や剪定等を行っている。地域の住民に見守られながら、生活の中に密着した大木として、これからも大切にしてもらいたいものである。

和名：オナガサイシン（カツウダケカンアオイ）
科名：ウマノスズクサ科
学名：*Asarum caudigerum Hance*
レッドデータカテゴリー：
絶滅危惧ⅠA類（沖縄県）、絶滅危惧ⅠA類（環境省）

シリーズ 沖縄の希少動植物③

植物

葉の形と毛深さに特徴
オナガサイシン（別名 カツウダケカンアオイ）

本種は山地で石灰岩地の林床に生育する多年生の植物で、台湾と沖縄島の北部にのみ分布しています。別名をカツウダケカンアオイといい、自生地である沖縄島北部の嘉津宇岳に由来します。

常緑の多年草で株全体に毛が多く、葉は長さ７～８㎝の広心形です。萼片（がくへん）３枚は癒合（ゆごう）し萼筒（がくとう）をつくり、外側には白い毛を密生し先端は長く尾状となります。

国内ではもともと、ごく限られた場所にしか分布しておらず、加えて近年では園芸用の採集などによって、その個体数は減少しています。

動物

特異な姿のヤドカリ
ヤシガニ

ヤシガニは、沖縄県や環境省のレッドデータブックで絶滅危惧種Ⅱ類に指定されている希少生物です。インド洋・西太平洋の熱帯・亜熱帯島嶼に広く分布していますが、日本では奄美諸島以南に生息しています。

ヤシガニは、陸上生活をする最大の甲殻類で、体重が２kgを超えるヤドカリの仲間です。海岸付近の林に生息して、アダンの実などを食べて暮らしています。夏の夜、波打ち際で腹部に卵を抱えた雌が幼生を海へと放ち、海で脱皮と変態を重ね上陸します。

和名：ヤシガニ
科名：オカヤドカリ科
学名：*Birgus latro*
レッドデータカテゴリー：
絶滅危惧Ⅱ類（環境省、沖縄県）

アダンの木に登っていることもあります。

橙色の卵は、波打ち際で海水に触れると孵化し、幼生は海へと放たれます。

沖縄の民話

久高島（南城市）

黄金（こがね）の瓜種（うりざね）

ある時、王様のお側で、お妃様がおならをしてしまった。王様の目前で粗相をしたということで、お妃様は久高島に島流しにされた。ところが、その時には、すでにお妃様はみごもっておられた。

月日が流れて、久高島で男の子をご出産なさり、お妃様だけで子供をお育てになり、いろいろと教育もなさった。その男の子が、少し物心がついた頃、友だちと喧嘩をした。その時、友だちから、「おれたちにはおとう（父親）が居るがお前におとうは居るのか。」と、わざと聞かれた。男の子は悔しくなって家に帰ると、「私の父はどこに居るのですか、父は居ないのですか。」と、母親に問いつめたので、「お前の父親のことについて言うのはまだ早いです。いつか話しますから。」と答えた。

そして、何年か経って男の子が、浜辺で遊んでいると、沖の方から壺が流れて来たので、それを拾い上げた。家に持ち帰って中を見ると、立派な黄金の瓜の種が入っていた。それを見た母親は、「今だから、話しましょう。実は私がお前をみごもっている時に、城内でおならをしてしまったので、ここに島流しをされてしまいました。お前の父親は、首里のお城におられるから、この種を持って行き、黄金の瓜種を買って下さいといえば、お前の父に会えます。」と教えて、首里に行かせた。

首里に着くと男の子は、お城の門の前で、大声で叫んだ。「黄金の瓜種を買って下さい。黄金の瓜種を買ってください。」すると、お城の王様がたまたまその声に気づき、「あの子供は、何と言っているのだ。」と、門番にお聞きになった。門番は「黄金の瓜種を買って下さい、と言っています。」と答えたので、

「ほう、それは面白い。見てみよう。」とおっしゃって、その男の子を城内に入れた。

それで、王様が直接ご覧になると、確かに立派な黄金の瓜種であったそうだ。「ほう、これは見事だ。では、これは私が買おう。」とおっしゃった。すると男の子は、「ありがとうございます。では、この瓜種を蒔くときは、おならをしない女の人に蒔かせて下さい。おならをする人に蒔かせると、生えてきません。」と言うので、王様は、「そんなばかな。人間におならをしない者がいるのか。」とおっしゃった。すかさず男の子は、「それならば、どうして私の母親を、おならをしたからといって久高島に島流しにしたのですか。」と言い返した。

驚いた王様は、男の子の母親の名前を聞いて、ああ、この子は私の息子なのだなと気付き、「そうか、お前は私の息子か。私が悪かった。では、母親と一緒に引揚げて来なさい。もう何の心配もせずに、ここに居なさい。」とおっしゃった。そして、三人仲良く、お城で暮らしたそうだ。

資料提供／NPO法人沖縄伝承話資料センター

おきなわ郷土村

沖縄の歴史と文化を伝える

沖縄の昔の集落を再現している「おきなわ郷土村」。沖縄の暮らしや文化を知る上で貴重な場所となっていますが、平成18年4月1日より「昔のおきなわ生活体験」がスタート。地元の人たちとのふれあいや昔の生活体験ができる場として、海洋博公園の新しい魅力のひとつになっています。

子どもたちと踊りを楽しむ

心温まるおばあたちとのふれあい

ガジュマルやフクギの濃い緑葉、苔むした石垣に赤瓦や茅葺の家、路端に咲く可憐な花、沖縄の魅力のひとつに「癒しの空間」がありますが、「おきなわ郷土村」（以下、郷土村）はそんな言葉がぴったりの心休まるエリアです。

郷土村は昭和55年に供用開始された施設で、約4ヘクタールの敷地内に、沖縄の昔の集落と「おもろ植物園」があります。昔の集落は琉球王国時代（17～19世紀頃）の集落を再現したもので、人々のよりどころだった御嶽（うたき）や神アサギ、拝所を中心に民家、ノロの家や地頭代の家、高倉、サーターヤーなどがあります。「おもろ植物園」には沖縄最古の歌謡集「おもろさうし」に登場する24種類の植物が植えられています。現在においても、生活とかかわりが深い植物で、歌謡に残して伝えてきた先人たちの思いが伺えます。

ふれあいの場となっている地頭代の家

郷土村は散策するだけでも心休まる所ですが、平成18年4月1日にスタートした「昔のおきなわ生活体験」の中核となっているのが、地元のおばあたちとのふれあいです。

集落内の地頭代の家（ジトゥデーヌヤー）を訪れると、明るく陽気なおばあたちが笑顔で迎えてくれます。おばあたちは海洋博公園のある地元・本部町の方たちです。誘われるままに家の中に入ると、お茶とお茶菓子が用意されています。家の中には三線（サンシン）もあり、興味のある人には三線や踊り（カチャーシーなど）も教えています。しかし、何と言っても楽しいのは、お茶を片手のおばあたちとの語らいです。沖縄の昔話や自らの体験談など、おばあたちと話をしているとついつい時間の経つのも忘れてしまいます。「いろいろな人と話ができて、ここに来るのが楽しいさー」と、おばあたちにとっても元気が出る場所、楽しい場所になっています。

おもろ植物園

観光客に三線の手ほどきをする

ゆったりとした時間が流れている郷土村

一年を通じていろんなイベントを用意

この郷土村の運営管理を行っているのは海洋博公園管理センター業務課の皆さんです。現在、担当スタッフは全部で3名。業務課の幸喜主任によると、「施設管理もありますが、郷土村を訪れる皆さんに沖縄の生活体験をしてもらうためのイベントを年間を通して行うため、材料の準備や指導者の手配、参加者募集や案内告知などが主な業務になりますね」とのことで、新しいイベントの企画やイベント内容をより充実させるために力を注いでいるといいます。

「おきなわ生活体験」の企画が始まった平成18年の2月には、「黒糖・ゆし豆腐づくり体験」を実施。黒糖はサトウキビ刈りから、ゆし豆腐は公園内の海水のニガリで固めるという本格的なもので好評を博しました。

ちなみに平成20年は、

- **「脱穀・げんまい作り体験」（7月）**
- **「しまことばによる絵本の読み聞かせ」（9月）**
- **「クバ扇作り体験」（10月）**
- **「鬼餅作り体験」（11月）**
- **「アダンを使った沖縄玩具作り体験」（12月）**

などを行いました。地頭代の家ではおばあたちが活躍していますが、生活体験イベントでは地元の方々も活躍します。

沖縄らしさが年々失われつつある今、「おきなわ郷土村」は沖縄を再認識する空間であり、沖縄を実際に肌で感じられる場所になっています。観光客はもちろん、地元・沖縄の人たちもぜひ訪れてもらいたいところです。

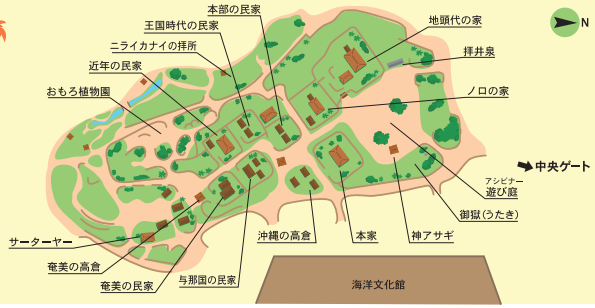
業務課の幸喜主任

沖縄の冬の風物詩「鬼餅作り」を楽しむ

昔の機械を使って脱穀する子どもたち

昔の沖縄にタイムスリップ！ おきなわ郷土村施設

施設名称	施設概要
集落施設	全体区域面積約4ha 民家8棟（赤瓦・白漆喰様式4棟・茅葺4棟）、御嶽、アシビナー、神アサギ、井泉、ニライカナイの拝所など
おもろ植物園	面積　約1,800㎡ 展示植物 草本類 3科8種類 木本類 13科16種類



亜熱帯性動植物に関する調査研究・普及啓発事業

絶滅危惧種タナゴモドキ繁殖への取り組み

タナゴモドキは、主として奄美諸島以南の河川に生息するハゼ亜目カワアナゴ科の、全長7㎝ほどの小型な魚です。本種は、環境省や沖縄県が近い将来における絶滅の危険性が高い種に指定している絶滅危惧種です。

沖縄美ら海水族館では、このタナゴモドキの繁殖と野外での生息状況調査に取り組んでいます。

タナゴモドキは、薄褐色の体色に紺色の縦縞が一筋入る地味な姿をしていますが、繁殖期の雄は鮮やかなオレンジ色へと変身します。産卵は、雄が産卵床に塗りつけた精子の上に雌が卵を産みつけるという特異な方法で行われます。卵径は約0.3㎜と魚類中最小級の大きさです。孵化直後の仔魚も、全長約1㎜と非常に小さな状態で孵化します。通常魚類の仔魚育成にはシオミズツボワムシという動物プランクトンを餌として与えますが、タナゴモドキの仔魚には大きすぎるようです。その為、野外で採取したプランクトンや微細な配合餌料、二枚貝の卵等様々な餌を試したところ、二枚貝の卵を与えたものは、現在孵化後約3カ月を経過し、全長約2㎝に成長しています。まだ、改良点はありますが、今回上手くいった方法を応用して、これまで困難とされていた小型卵を産む魚類の繁殖にも活用できるものと期待しています。

また、野外のタナゴモドキ生息状況調査も毎年行っています。タナゴモドキが近い将来絶滅してしまわないために、今後も調査を続け、現状を把握していきます。

繁殖期のタナゴモドキ

孵化２時間後

孵化後62日目

海洋博公園での学芸員実習

海洋博公園では、博物館法により定められた、学芸員課程における実習（以下、学芸員実習）を、年2回（7月・11月）実施しています。本実習は、主に県内の大学において学芸員課程を履修する学生を対象として、魚類課（沖縄美ら海水族館）、植物課（熱帯ドリームセンター・都市緑化植物園）、業務課（海洋文化館）が担当となり、10日間にわたって公園内各施設での実務研修を実施しています。

魚類課では、生物の飼育および展示に関わる実務、解説業務の見学、標本管理の方法や博物館コレクションに関する実務、プレゼンテーションの方法などについて、業務全般を体系的に学べるよう努めています。

一般に博物館実習では1つの施設を対象とするため、歴史・文化・自然の全ての分野を網羅することは困難ですが、海洋博公園は自然と文化の両者を、実習内容に取り入れることが可能です。

平成20年度は、前期7月31日～8月9日、後期10月17日～30日の日程で、合計7名の履修生を受け入れました。

マナティーしいく体験

マナティーやジュゴンの生態を知って頂く為、マナティー館では、今年もしいく体験を実施しました。マナティーは、大西洋地域の熱帯、亜熱帯に分布し、川や湖、浅海の水温の高い場所に生息しています。一方、沖縄にも生息するジュゴンは、インド・太平洋海域の浅海に分布し、南西諸島がその北限として知られています。しかし、マナティーとジュゴンは姿かたちが似ている事から両者はよく混同されます。彼らが草食の水生哺乳類である事も一般にはあまり知られていません。

2年目になる今年のマナティーしいく体験では、合計163名の方が参加し、調餌や給餌など、直に接する体験を通してマナティーへの興味や理解を深めて頂く事が出来ました。イベント当日、参加者は野菜を切って餌作りを行い、実際に給餌も体験しました。マナティーが草食である事を初めて知った方や、餌への嗜好性など、それぞれに新しい発見をして頂けたようです。また、マナティーの体のつくりや生態、ジュゴンとの比較、海草藻場の大切さ等について、クイズやスライドを使って楽しく学習して頂く事が出来ました。

今後、マナティー館ではより魅力的な学習内容を提供するイベントを開催していけるよう、飼育係一同日々努力を重ねていきます。

自分で切った野菜を給餌する参加者

海牛類についての学習会

イルカの長期飼育への取り組み

2008年12月現在、海洋博公園の飼育イルカは、国内では当公園のみが飼育しているミナミバンドウイルカ6頭とシワハイルカ3頭の他、オキゴンドウ4頭、カマイルカ2頭、バンドウイルカ2頭、当公園産まれのバンドウイルカとミナミバンドウイルカの交雑種2頭の計19頭がいます。そのうち10年以上の長期飼育個体は9頭で、飼育頭数に占める長期飼育個体の割合は、全国のイルカ飼育園館よりも高くなっています。

1975年の沖縄国際海洋博覧会のために奄美大島で捕獲されたミナミバンドウイルカ5頭は、飼育歴34年を迎えましたが、現在でも現役で頑張っています。なかでも「オキちゃん」は、1999年に繁殖に成功し、親子でオキちゃん劇場のイルカショーに出演しています。イルカが性成熟に達するのは、国内で最も多く飼育されているバンドウイルカを例に挙げると、雄は10～12歳、雌は7～10歳とされており、飼育動物を長期飼育することは、繁殖可能個体を増やし、今後の水槽内繁殖を推進することにもつながります。

当公園では、イルカの健康管理のため、長年にわたり定期的な血液検査と、消化器や呼吸器の細菌・真菌検査を行い正常な生理値と菌叢の把握と、内視鏡、超音波、レントゲン検査により各個体の臓器の状態把握に努めています。これらの検査結果は、各個体の疾病発症時の治療方針の決定に大いに役立ち、イルカの長期飼育を可能にしています。

オキちゃん（右）親子

現在でも現役で頑張っているミナミバンドウイルカ

オキナワセッコクの着生試験

本種は、沖縄本島北部の山地に自生する着生ランで、沖縄島の固有種です。白色から淡紅色の清廉な花を咲かすこと等から人気があり安易な採取、開発等により個体数が激減しています。国内では特定国内希少野生動植物種に指定されています。当財団では、これまで、オキナワセッコクの自生地生育調査等を行ない、無菌播種による増殖技術、育成技術を開発してきました。また、増殖育成したオキナワセッコクを供試し、管理エリア内での着生試験等を実施しています。奥深い自然林に着生し生育していることから、薄暗いところを好むと思われましたが、これまで（２００３年７月25日開始から）の着生試験では、比較的明るい場所での生育が良好で、活着率が高いことがわかりました。

沖縄には日本国内に自生する過半数の野生ランが成育し、そのほとんどが絶滅の危険性にさらされています。今後も、野生ランを中心とした自生地生育調査を行ない、無菌播種等による増殖技術や育成技術をたかめ、ラン類等の希少植物の保護・増殖を行っていきます。また、生物多様性保全に寄与する等、普及啓発を継続したいと考えております。

着生後（33ヶ月経過）の生育状況

供試株（無菌播種による増殖株を使用）

ハイビスカスの収集

ハイビスカスは熱帯を代表する花木の一つで、花の大きさ、花の色、一重咲き、八重咲き、段咲きなど実に多種多様で魅力にあふれています。ハイビスカスが分類されているアオイ科ヒビスクス属は世界の熱帯・亜熱帯を中心に約２５０種が知られており、一般にハイビスカスあるいはハワイアンハイビスカスと総称されているグループの起源となったものはそのうちの19種といわれています。これらの原種やブッソウゲなど自然交雑種を親にして交配が進み現在では３、０００種以上に及びます。

ハイビスカスの開花調査

当財団では沖縄の都市緑化材料として活用するためハイビスカスの導入をすすめています。それには沖縄の自然環境に適応し、なお且つ花が美しい、年間を通して良く開花するなど優れた特性を持つ種類が求められます。そのため導入したハイビスカスについて花の特徴や開花時期などの基礎的な調査を行っています。

これからも積極的にハイビスカスを収集し、それぞれの特性の調査を行い熱帯・亜熱帯性植物の普及啓発に役立てたいと考えています。

ハイビスカスの花の大きさ調査

首里城に関する調査研究・普及啓発事業

皇帝御書扁額『中山世土』の製作

首里城公園が開園して3年目の1995年に当財団は、かつて首里城正殿大庫理（二階）に掛けられていた中国皇帝の御書（直筆の書）を扁額にした『中山世土』といわれる扁額を製作しました。歴代の中国皇帝は、即位の時や、皇帝の古希のお祝いの時などに自ら認めた書を琉球に贈っていたのです。琉球王国では、皇帝から書を贈られるごとに木製の扁額に写し取り、漆を塗って正殿の二階に掛けました。

そのため正殿の二階は、「大庫理」と呼ばれていましたが、別名「御書楼」と呼ばれることもありました。琉球王国末の19世紀後半には、大型の漆塗りの扁額9枚が掛けられていたのです。『中山世土』は、康熙帝という清朝第4代皇帝の直筆の書で、清朝皇帝の御書扁額の中でも一番古いものでした。

康熙帝（在位1661～1722）は、三藩の乱（1673～1681）を平定し、台湾の鄭成功を討伐（1683）、ロシア帝国と国境交渉を行い両国の国境を確定させるなど、清が安定化する基礎を築きあげました。また『康熙字典』などの多くの書籍を編纂させ、文化事業にも熱心な皇帝だったのです。

康熙帝は、康熙21（1682）年に『中山世土』の4文字を書いて、翌年尚貞王を冊封（国王として皇帝が認める行為）するために琉球へ派遣した冊封使汪楫に託して琉球に贈ったようです。

正殿二階中央に『中山世土』という扁額があったことは記録で判っていました。古文書などで、扁額の寸法や字の周辺に龍の彫刻がされていたことは判りましたが、扁額に書かれた書跡の写しや写真などは残されていませんでした。そのため、製作は困難を極めました。当財団は、北京に所在する中国第一歴史档案館（日本の国立公文書館に相当する資料館）に情報提供を呼びかけましたが、『中山世土』の書跡そのものは見つかりませんでした。しかしながら、北京故宮の中にある扁額や、清朝期（1644～1912）の膨大な史料の中から、康熙帝本人の直筆の書の所在を調査する中で、康熙帝が書いた『萬世師表』の四文字を孔子廟から見つけ出しました。この貴重な康熙帝の直筆の筆跡情報を沖縄に持ち帰り、康熙帝の筆跡の分析を行い作字しました。そして書を扁額の原寸大に拡大して、書家に扁額へ写し書きをしてもらい、彫刻した後に漆を塗って扁額を完成させました。

正殿二階大庫理（うふぐぃ）に掛けられた皇帝御書扁額。中央が『中山世土』

中山世土の製作風景。製作者は漆芸家 前田孝允氏

海洋博公園

海洋博公園 1月～3月イベント

新春の風薫る季節は、花々が彩る海洋博公園で！

新しい年を迎え、海洋博公園は沖縄のお正月体験が楽しめる「新春果報でーびる」で幕を開けます。

イルカについて楽しく学ぶ「冬休みイルカ学習会」、やんばるの美しい自然を感じながら走る「全国トリムマラソン大会」、沖縄の一足早い春を感じさせる「美ら海花まつり」など多彩なイベントが盛りだくさん！

また、日本最大級のラン展「沖縄国際洋蘭博覧会」期間中は公園内が色とりどりの花で埋めつくされます。花いっぱいの海洋博公園へ、ぜひお越し下さい。

平成19年度美ら海花まつり会場の様子

公園全体で遊ぶ

新春果報でーびる

くわっちー振る舞いでは、お正月やお祝いの席では欠かせない伝統料理等を振る舞い、島の長寿の源をまるごと"食体験"できるコーナーや、三線・三板（サンパ）・パーランクーなど沖縄の楽器や芸能を実際に、"触体験"できるコーナーを用意しております。芸能披露では、沖縄に伝わる華麗な琉球舞踊や、勇壮なエイサーなどをお楽しみいただけます。お正月は家族そろって、見て！食べて！体験できる！海洋博公園で楽しもう。

●1月1日（木）～3日（土）
●9:00～17:00
●お問い合せ／業務課 業務係（TEL0980-48-2741）

場所 中央噴水広場・おきなわ郷土村・海洋文化館2階 無料

第30回海洋博公園　全国トリムマラソン大会

海洋博公園を中心にやんばるの豊かな自然の中で開催される人気のトリムマラソン大会。

※申し込みは終了しました。
●1月18日（日）
●9:30～
●お問い合せ／海洋博公園全国トリムマラソン大会事務局（TEL0980-48-2741）

場所 海洋博公園内外 見学無料

第4回美ら海花まつり

ジンベエザメやマンタなど水族館の人気者たちを形どった、かわいい花の造形物がお出迎えします。中央ゲートや噴水広場、水族館周辺に設置される模様花壇も見応えあり。さらに、ハンギングバスケット制作など、一般の方々や子供達が体験できる場も設定！花いっぱいの沖縄を楽しんで下さい。

●1月24日（土）～2月22日（日）
●お問い合せ／海洋博公園（TEL0980-48-2741）

場所 海洋博公園中央ゲート 無料

沖縄国際洋蘭博覧会

国内最大級のラン展。会場となる熱帯ドリームセンターの大温室では、国内外から出展された１万点以上のランが美しさを競います。今年のテーマは「ランと遊ぶ」。会場内はランを用いたユニークな展示装飾が満載です。期間中はランに関する各種イベントも充実。南国沖縄でひと足早い春を楽しもう！

※美ら海水族館入館券提示で半額

●2月7日（土）～15日（日）
●お問い合せ／沖縄国際洋蘭博覧会事務局（TEL0980-48-3624）

場所 海洋博公園 熱帯ドリームセンター 料金／大人670円　子供340円

黒糖作り体験

サトウキビから黒糖作りを体験できます。沖縄の伝統的な方法を再現し、サーター車（サトウキビを搾る機械）を廻してサトウキビを搾る本格派です。

※定員：1日25人（要予約）
●2月7日（土）～8日（日）
●10:00～15:00
●お問い合せ／業務課 業務係（TEL0980-48-2741）

場所 おきなわ郷土村 無料

三線演奏体験

三本の弦が奏でる美しい音色！そんな沖縄に伝わる魅力的な楽器を体験してみませんか？地元のおばぁと、ゆんたく（おしゃべり）しながら、三線を愉しみ、ゆったりとした時間をおすごしください。

※随時実地
●3月7日（土）～8日（日）
●10:00～16:00
●お問い合せ／業務課 業務係（TEL0980-48-2741）

場所 おきなわ郷土村 無料

生き物とふれあう

冬休みイルカ学習会

イルカの生態、健康管理などについて解説します。

※15:00～15:20　※当日受付
●12月27日（土）～1月6日（火）
●お問い合せ／海獣課（TEL0980-48-2748）

場所 イルカラグーン 無料

花と緑とふれあう

植物のクラフト作り

1月 カレンダー作り・今年の干支「丑」を作ろう
2月 木の実で遊ぼう・バッタを作ろう
3月 メダルを作ろう・フトイで腕輪を作ろう

※団体（10名以上）でご利用の際は、事前にご連絡ください。
●毎日開催！
●お問い合せ／都市緑化植物園（TEL0980-48-3782）

場所 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園 無料

植物園ガイド

事前予約して頂いた希望者に見本園をガイドツアー形式でご案内いたしております。沖縄の都市緑化に適した様々な植物や利用方法等を分かりやすく紹介します。
＊環境学習プログラムも始めました。

※要事前予約。お気軽にお問い合わせください。
●毎日開催！
●お問い合せ／都市緑化植物園（TEL0980-48-3782）

場所 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園 無料

グラウンド・ゴルフ

植物園では、グラウンド・ゴルフが無料でプレイできます。全24ホール設置で、ロングコース、ショートコースが選べます。緑豊かな植物園の樹木たちを眺めながらご家族、お友だち同士でお楽しみください！

※団体（10名以上）でご利用の際は、事前にご連絡ください。
●常時開催！
●お問い合せ／都市緑化植物園（TEL0980-48-3782）

場所 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園 無料

※イベント実施内容は変更になる場合がございます。最新情報や詳細は公園ＨＰ等でご確認、またはお気軽にお問合せください。

首里城公園

首里城公園 1月～3月イベント

朱色に輝く首里城と彩り豊かな草花で皆様をお迎えします

２００９年、新春の幕開けを首里城公園で迎えてみませんか。

首里城公園では、毎年恒例のお正月イベント「新春の宴」が、元旦から３日間行われます。

往時のお正月の厳かな儀式を体感した後は、新春ならではの華やかな琉球舞踊のステージをご覧いただけます。また、1月下旬からは「首里城花まつり」も開催されます。

この時期は、花まつりイベントと併せて色とり豊かな首里城公園をゆっくりお楽しみください。

平成19年度首里城花まつり会場の様子

第17回首里城公園「新春の宴」

日時：平成21年1月1日（木）～1月3日（土）　場所：首里城公園　御庭・下之御庭

【御座楽の演奏】

奉神門で毎朝8：30に行われている「御開門」後に琉球王朝時代に演奏された御座楽を3日間毎日開催します。

●実施日：1月1日（木）～1月3日（土）
●場　所：御庭（雨天時の場合は、正殿内部）　※入館料のみ
●時　間：8：30～8：50

平成19年度 新春の宴「国王・王妃出御」の様子

【正月儀式 朝拝御規式】

第一部「子之方御拝」、第二部「朝之御拝」、第三部「大通り」の3部構成で琉球王朝時代、国王、王妃、王族、高官等の参列する中、執り行われていた朝賀儀式を披露します。

●実施日：1月1日（木）～1月2日（金）
●場　所：御庭　※入館料のみ
●時　間：10：00～11：50

【国王・王妃出御】

御座楽の演奏とともに、国王・王妃が揃って正殿から出御します。

●実施日：1月3日（土）
●場　所：御庭　※入館料のみ
●時　間：9：00～11：20

【琉球芸能の宴（琉球舞踊・地域の民俗芸能）】

13時から1日4回公演で、正月にふさわしくめでたい琉球舞踊（古典舞踊、雑踊り）、地域の民俗芸能などを披露します。

●実施日：1月1日(木)～１月３日(土)
●場　所：下之御庭　※無料
●時　間：13：00～17：00

【お茶振る舞い】

本部席横に振舞いコーナーを設け、紅型衣装を身に纏った女性より御茶が振る舞われます。

●実施日：1月1日（木）～1月3日（土）
●場　所：下之御庭　※無料
●時　間：8：30～17：00

首里城花まつり

首里城花まつり期間中は、下記のイベントを毎日開催いたします。

期間中は、クイズラリーや琉球舞踊のステージ、草花で彩られた首里城をお楽しみいただけます。

●実施日：1月24日（土）～2月22日（日）
●場　所：首里城公園内　※無料区域

財団からのお知らせ

平成20年度 海洋博覧会記念公園管理財団 環境保全活動支援エコクーポン事業募集のお知らせ

当財団では、沖縄県北部地域及び周辺離島の環境保全活動に取り組む団体等を支援するため、「環境保全活動支援エコクーポン事業」を開始しましたのでお知らせ致します。

エコクーポン
環境保全活動の支援として、沖縄美ら海水族館の入館チケットを環境保全活動参加者への特典（エコクーポン）として提供します。

支援の対象となる活動
沖縄県北部地域及び周辺離島に生息する希少動植物の保護、海岸清掃、赤土流出抑制に関する実践的な活動

支援の対象となる団体
沖縄県北部地域及び周辺離島に活動の本拠を有し、環境保全活動を行っている特定非営利活動法人、法人格を持たない任意団体又は非営利の民間団体

応募方法
支援を希望される方は、所定の申請書に必要事項を記入し持参もしくは郵送で提出してください。

応募の締め切り
平成21年2月28日（土）

詳しくは「環境保全活動支援エコクーポン事業実施要領」をご覧下さい。当財団ホームページ（kaiyouhaku.jp/eco-coupon）からダウンロードできます。

問い合わせ及び申請書提出先
財団法人海洋博覧会記念公園管理財団
本部　調査企画課
〒905-0206　沖縄県国頭郡本部町字石川888番地
TEL：0980-48-3645
FAX：0980-48-3900

財団本部事務所移転のお知らせ

このたび、当財団本部事務所棟の新築完成に伴い左記へ移転致しました。

移転先住所
〒905-0206　沖縄県国頭郡本部町字石川888番地
TEL：0980-48-3645（従来どおり）
FAX：0980-48-3900